

伝統を 守り続ける 文化財の 警固祭り



▲菱野のおでく警固祭り



▲山口の警固祭り

歴史

尾張と西三河の農村部では、馬の背に標具と呼ばれる札や御幣を載せ、首や胴部も豪華な馬具で飾って、氏神や近隣の社寺へ奉納する献馬の習わしが古くから行われてきました。このような献馬の習わしは、「馬の塔（オマント）」とも呼ばれ、豊作に感謝する秋の祭礼として行われるものです。中には、献馬を警護する鉄砲隊や棒の手隊などが加わり、隊列をなす「警固祭り」が今日まで残されている地区も瀬戸市にはみられます。

「献馬」や「警固祭り」がいつ頃から始められたかは定かではありませんが、いくつかの記録や伝承から、戦国時代から江戸時代にかけて今日のような祭りのかたちが作られてきたと考えられています。

豊年が見込まれる年などには、三河の猿投神社などの秋の例大祭に、周囲の各村に対して飾り馬を奉納するように呼びかけがあり、瀬戸市南半（山口、菱野、本地、美濃池、今村、赤津、瀬戸）から尾張旭市の一部（狩宿、井田、瀬戸川）の10か村からは、山口村がとりまとめ役となった「山口合宿」と呼ばれる献馬の一団を組織し、大規模な隊列で飾り馬の奉納をしていました。

また、明治期以降には、今日の幡山地区ほか複数の村々を含む区域の郷社である山口八幡社に、区域内の各村が献馬をする「郷社祭り」も行われていました。祭礼で飾り馬を出し、村の名を記した標具を載せることは、一つの独立した村としての名誉を示すものであり、各村の標具は個性豊かなものとなっています。

祭りの仕切り役になれば、寝ていることができないほどの忙しさで、「郷社まつりは敵討ちのようなもの」と言われるぐらい、各シマ※に祭りへの参加を頼みに行ってもなかなかうんと言わないものだったそうです。

幡山地区では、現在も「菱野」「山口」「本地」がそれぞれ氏神の祭礼に飾り馬を奉納し、かつての「山口合宿」「郷社祭り」のありようを今日に伝えています。

※「シマ」：村内の小地区のまとまりを表す単位。

文化財

文化財には、形の有無から「有形文化財」「無形文化財」、文化財の性格から「民俗文化財」「記念物」「文化的景観」「伝統的建造物群」といった種類があります。文化財の中で、特に重要なものは、国や県、市が指定・選定を行って保護の対象としています。現在、市内には、11件の国指定文化財、10件の県指定文化財、50件の市指定文化財があります。

「菱野のおでく警固祭り」と「山口の警固祭り」は市指定 無形民俗文化財に指定されています。

無形文化財とは…演劇、音楽、工芸技術などの形を伴わない文化財。

民俗文化財とは…衣食住、生業、信仰、年中行事などの風習・民俗芸能や、これらに用いる衣服、器具、家屋などに関する文化財。

菱野の おでく警固祭り

10月16日(日)

午前7時～午後4時10分

献馬場所：菱野熊野社（東菱野町59-1）

※各町内を巡回し、午後1時50分に菱野熊野社に到着予定。

旧菱野村の氏神である菱野熊野社では、毎秋に例大祭が行われ、豊年など特別な年には「おでく」と呼ばれる人形を載せた飾り馬を奉納する「菱野のおでく警固祭り」が行われます。今年は、3年ぶりの披露となります。

「おでく」は、天正12(1584)年の小牧長久手の戦いの時、豊臣方武将の梶田甚五郎が、猿投神社へ戦勝祈願に向かう途中、菱野の村人に誤って殺される事件があり、そのたたりを恐れ甚五郎を模した人形を馬に負わせて猿投神社に奉納したことに由来すると伝えられています。鉄砲隊を伴う警固隊に守られた「おでく」は、地区に伝わる起倒流・検藤流ほかの棒の手とともに熊野社へ奉納されます。菱野熊野社に隣接した菱野郷倉には、同地に所在した東福寺（廃寺）に伝えられた鎌倉時代から戦国時代に印刷された大般若経や、江戸時代以降の菱野村関連文書類の菱野郷倉文書が大切に保管されています。

7月24日 菱野郷倉虫干しが行われました

この日は、菱野郷倉に大切に保管されている飾り馬の馬道具や警固隊の衣装、菱野のおでくさんなどを倉庫から出し、湿気を除き、カビや虫害を防ぐために風を通す虫干しが行われました。

この虫干しは、菱野地域に代々引き継がれている行事で、地域の方は「この時期になるとやらないかんという気持ちになる。」と言いながら作業をされていました。

このような行事を通して、年配の方が若い方たちに代々伝える道具の組み立て方などを伝授しながら、皆で助け合い、祭りの準備が進められていきます。



山口の警固祭り

10月16日(日)

午前8時30分～午後3時頃

献馬場所：山口八幡社(八幡町3)

※各町内を巡回し、午後2時に山口八幡社に到着予定。

旧山口村の氏神である山口八幡社では、毎秋、飾り馬が鉄砲隊を伴う警固隊に守られて地区内を練り歩き、棒の手とともに奉納されます。山口の棒の手は、もともと起倒流きとうりゅうが行われていましたが、その後一旦途絶え、明治時代に長久手の北熊地区より技を習得し、再び行われるようになったと言われています。警固隊が神社に着くと、境内で飾り馬を走らせ、鉄砲隊の発砲や棒の手の演技を行います。

現在の山口の警固祭りは「九本の銀鷹の矢」を標具ぎんようとしており、武田信玄の武将である山田信濃守やまだ しなののかみにまつわる伝承からとされています。

9月25日 馬とのふれあいが行われました

この日は、曳き馬を担当する山口地域の方が、長久手町の牧場に出かけ、祭りの当日、実際に山口地域を歩く馬とふれあいました。

地域の方は、「奉納」という言葉を略した「ホイサツ、ホイサツ」と威勢の良いかけ声をかけながら、牧場周辺で馬曳きの練習を行いました。大きな馬を見て「とてもやりがいのある馬だな。」と話されているのが印象的でした。練習後、馬の体をやさしく洗ってあげると、馬はとても気持ち良さそうな顔をしていました。

馬とのふれあいは、祭りの前に4、5回行い、馬に顔を覚えてもらいます。伝統を守り続けようとする若い方たちの活躍がとても頼もしく見えました。



本地の警固祭り

10月16日(日)

午前8時30分～午後2時

献馬場所：本地八幡社(西本地町2丁目158)

※各町内を巡回し、正午に本地八幡社に到着予定。

旧本地村の氏神である本地八幡社には、毎秋、鉄砲隊を伴う警固隊に守られた飾り馬が、起倒流きとうりゅう・検藤流げんとうりゅうの棒の手とともに奉納されます。

本地の標具だしは札の形を金網で作り、左右両方に柄杓ひしゃくを1本ずつ出すものです。

